

山に親しみ山に想う (5)

— なぜ山に登るのか — その2 (2/2)

<文・写真> =岡本=

・ 少し弛緩してしまったので、世界に冠たる有名な登山家ラインホルト・メスナーはどう述べているのか、大変長くなるがみてみたい。

著書「極限の挑戦者」の第2章「研ぎ澄まされた存在」の中で、1979年9月ドイツ新聞のインタビューの質問、(登山のもっとも大きな原動力は?)に答えて「どうして、登るのかっていうことですか。自分でもよくわからないのです。たぶん、答えがはっきりしていたら、登らないのではないかと思います。」、(人はどこまで耐えられるか、その限界がテーマなのでは?)「解釈のひとつとしては、自然があり、山があつて、それを楽しむ。自然を体験する。でもそれは、ただの表面的な説明に過ぎないし、僕にとって十分な説明とは言えません。考えてみたんです。これはもしかすると中毒、もっとタチの悪いたぐいの中毒ではないか、と。ただこれも、表面的な説明の延長にしかすぎないと思います。人というのは、「なぜ」という問いに答えられないものなのだと、僕は思うのです。「どうして生きるのか」「どうして山に登るのか」このふたつは大差ないのです。」、(自分の限界を広げるためですか?)「限界を見極め、自らの力だけでなく、恐怖心や迷いを克服する。それは、山登りを単なる楽しみ、とするよりは、深く掘り下げた答えです。けれど、どうして人は、こうやって真意を汲み取ろうとするのだろう。たぶん、そうすることではじめて、本当にうまれてきたということになるのではないかと思うのです。」と述べている。また、別のところで、こうも言っている。「登山とは、苦悩の中で演じられる壮大なドラマだ。こんな苦しみとはおさらばしよう、危険に身を晒すのはやめようと、もう何度、自分に言い聞かせたことだろう。それなのに、僕は、また登る。登り続けずにはいられないのだ。」「自分が依存症に陥った者のごとく、より多くの危険を、より困難な山行を、よりヒヤリとすることを求め続けていることだ。死の地帯で、奇妙な音、現象、そして幻覚を感じ始めるとき、新たな側面がそっと僕の前に姿を現し、死の予感が、まったく新しい生のビジョンへと化していくのである。」「8000M級の山から戻った僕はいつも、新しい自分を発見したと確信し、これまで以上に強くなった気がする。死との出会いが、新たな生を感じさせてくれる。新生児になり、新たな人生が始まるような、まるで真理に少し近づけたような、そんな気がしてならない。そう、僕を生かしてくれるのは、登った山の頂ではない。人の住む場所へ戻ることなのだ。」と重厚な応えをしている。一緒に登った弟を遭難死させた経験があり、そのことを非難されたりもしたメスナーは、極限登山では極限登山における掟があり、下界の俗世とは別の条理が支配せざるを得ない旨を「8000Mを超える高山で、百年前から謳われているような登山仲間はいないと思います。例えば、ひとりが死に瀕している時、他の者は、あと五分そこにとどまれば、自分も命を落とすことを頭ではなく全身全霊ではっきりとわかっています。そんな状況で、弱った者を助けたり、下るのを待たせられるはずがない。英雄的精神も、そこでは何の意味もなさないのです。」と述べている(同書 第3章「本当の自分を探して」)。彼岸ともいえる極限登山から此岸に戻ってきた登山者は、擬死からの再生を体験した者と言えるのではないか。修験道の生死を賭けた奥駈けを終えた道士のようである。



・E・ウインパーは「アルプス登攀記」の中で簡潔に「それは私に、人生にとって 最も大切な二ツ —健康と友情— を与えてくれるからである。」とも述べている(「ヤマケイ登山学校(1)」より)。

・ ヨツイン・ヘムレブは「そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見記」の中で「ときには困難で危険をとまなうかもしれないが、登山の本質には純粹さと明快さがある。近年登山が盛んになった理由は、感情面の欲求を満たしてくれるということがあると思う。登山には初めがあり、中間があり、終わりがある。登山は目標がはっきりしている。—山頂に到達すること、複雑な登山ルートに取り組むこと、露出感を味わうこと、そして明確な結果を得る— 登頂できたのか、できなかったのか、どちらかだ。現代生活の多くの事柄と違って、曖昧さや不確かさ、多義性などはない。しかも、登山は肉体の挑戦にとどまらない。知的挑戦、感情的挑戦でもある。地形的な高所に到達するだけでなく、感情の高みにも達する。山頂を極めることほど、達成感や満足感を味わえることはない。」と述べている。

・ 日本近代登山の黎明期に大きな影響を与えた「日本風景論」(1894年刊行)の著者志賀重昂は同書の中で「…山に登るいよいよ高ければ、いよいよ困難に、ますます登れば、ますます危険に、いよいよますます万象の変幻に逢遭して、いよいよますます快樂の度を加倍す。これを要するに、山は自然界のもっとも興味あるもの、もっとも豪健なるもの、もっとも高潔なるもの、もっとも神聖なるもの、登山の気風興作せざるべからず、大いに興作せざるべからず。」と述べている(「山の名著30選」より)。



・ 小泉武栄著「登山の誕生」から引用する。登山史の書「世界の屋根に挑む」の著者ヒンドレイは、人が冒険を冒してまで登山をする理由として五つ挙げている。一つに、何かを征服したいという本能としての欲望の現れである。二つに、未知への憧れである。山の向こうに何かがあるに違いない、それを探してみたいという人間の本能であろう。三つに、冒険愛である。危険や困難を克服し、自分の技術や忍耐力、勇気を試そうとするのも、登山の魅力も一つと言える。四つに、山の魅力に触れることである。息を呑むような景観に見惚れているうちに、自然と一体となった自分を見いだす。時には、宗教的、神秘的とも言える体験すらすることができる。五つに、登山に名誉を求めることである。登山家は国家の威信や登山史に名を残したいと考える。ヒンドレイは、更にこれらの理由を挙げても、登山の魅力十全に説明したことにはならないという。真の登山家にいわせれば、山に登る理由などは説明のしようがなく、また、説明の必要もない。山が呼んでいる。それに応えて山に出かける。ただ登ってさえいけば、幸せに思えてくる。そのために登るというのである。著者小泉武栄は、ヒンドレイが挙げたこれだけでは、つい200年前までヨーロッパ人が山に登ることすら思いつかなかったということの説明がつかないと言い、江戸時代の日本では登山が一種のブームにすらなっていたが、それが近代的な登山に直接つながらなかったのはなぜか、と論点を提示している。自分はこんな考え方である。一神教キリスト教徒のヨーロッパ人は、近代思想の勃興により宗教的呪縛から解放されて、楽しみの近代登山を始めたのに対し、日本では欧州との自然風土の違いもあり、人は自然と親和し、宗教的にも山は聖地であった。信仰登山と共に既に娯楽の要素や生活に密着した登山が行われてきており、殊更に近代登山の概念を考え出す必要性に迫られなかったのではないか。近代登山を欧州より導入したのは、欧州文明導入の先鋒として活躍していた社会的上層の若者達であった。現在日本では、明治政府の宗教政策の影響もあって、近代登山の隆盛の一方で信仰登山の衰微が著しいが、高山に登った登山者が日の出の「御来光」を見たがるのは、ただ太陽の美しい光輝を見たいからというだけではなく、どこかに宗教的「御来迎」を体験したいという、今様に言えば長い伝統をもつ信仰登山のDNAの表れではないだろうかと思われる。

・ 加藤文太郎は「単独行」の第1章「単独行について」の中で「我々は何故に山へ登るのか。ただ、好きだから登るのであり、内心の制しきれぬ要求に駆られて登るのであるというだけでよいのであろうか。それなら酒飲みが悪いと知りつつ好きだから、辛抱できないからといって酒を呑むのと同じだといわれても仕方があるまい。だから我々は山へ登ることは良いと信じて登らなければならない。山へ登るものが時に山を酒呑みの酒や、喫煙者の煙草にたとえているのは実に片腹痛いのである。」と述べ、続けて、単独行についてこう言っている。「もしも登山が自然から色々の知識を得て、それによって自然の中から慰安が求め得られるものとするならば、単独行こそ最も多くの知識を得ることができ、最も強い慰安が求められるのではなからうか。何故なら友とともに山を行くときは時折山を見ることを忘れるであろうが、独りで山や谷をさまようときは一木一石にも心を惹かれないものはないのである。もしも登山が自然との闘争であり、自然を征服することであり、それによって自然の中から慰安を求め得られるとするならば、いささかも他人の助力を受けない単独行こそ最も闘争的であり、征服において最も強い慰安が求められるのではなからうか。」ところが、第2章の「山と私」では「私はしばしば山に登る。それは山がいつも私の前に立っており、私はただわけもなく、それに登りたくなるのだから。」と矛盾するようなことも言っているが、酒飲みがわけもなく酒を呑み、山好きがわけもなく山に登るのも、重なるところがあるようだ。

・渡部由輝は「永遠の未踏峰 人はなぜ山に登るのか」の中で、極限行(登山)とは総論的にいえば、正と反を統合した「全体性に対する希求心」を満たしたいことから、日常とは反的に異なる事象や状況を多く有する場、すなわちある種の「反的世界への志向心」をもつことになり、依って生じる行為であり、その反的世界とは、日常とはかけ離れて異質なものであるだけに、行為者はそこにおいてひとしく臨場的、自覚的意識が得られるものであるとしている。そして、得られるものとして、次のものを挙げている。

「日常からの解放意識が得られる」「解放意識の一種であるが、祭りの熱狂感に似た感覚が味わえる」「自分自身の隠されている資質に目覚められる」「自分自身の日常的状況が明瞭に自覚される」「人間以外のなにものかになれているかのような感覚が持てる」(単独行の場合)

著者は最後に、「人は変わった風景や珍しい事物を見たいがためだけで、山に登るのではないはずだ。身体的運動の一環としてだけで、登るのでもないはずだ。それら形而下的事象を求める登山もあるが、そのような目的の登山ばかりではない。なにか形而上的状况をも希望して山に向かう登山行為者もいる。…登山とはもしかすると「人間存在の根源的状况から派生する奥深い文化的事象」なのかも知れない。」と結んでいる。「永遠の未踏峰」は副題に「人はなぜ山に登るのか」が付されているとおり、真正面から追求しようとする本である。

3. (1) ここまで多くの登山家などの言葉を引用してきたので、ここらで自分についても述べたい。山を趣味にしていない人から(なぜ山に登るのか?)と問われれば、「定年になって時間がある。生活習慣病予防にも良いし、健康維持と体力増強になるので、低山を歩いている。」と応える。さらに、(それならスポーツジムでもよいのではないかと、なぜに山を?)と問われれば、「ジムが高いのに比べ低山歩きは比較的安くできる。それにも増して、年をとって眠ってしまっている好奇心やヤル気呼び起こしてくれるんだ。」(では、どんなこと?)と更に問われれば、「小さい頃に追っかけた虫、昆虫がいるし、鹿や狐などの小動物も見られるし、草花や樹木にも触れる。山野の景色、溪流、地形、地層も興味深い。山道や里には仏像や歴史的遺跡もある。里山の集落や生活振りをつぶさに見るのも得るものがある。里山の老人や子供とちょっとした会話を交わすのも心がなごむ。天候や安全のためのサバイバルにも気を使う。もっともっと挙げればキリがないほど、好奇心を掻き立てるものがそこらじゅうにゴロゴロしている。スポーツジムや草野球、サッカーなどではこうはいかない。山歩きは好奇心、関心の宝庫だ。変な言い方だが、昆虫学、植物学、地形学、地質学、民俗学、歴史学、宗教学、気象学、環境学、生態学、林業、農業、水利……更には経済学、社会学にも関わってくる。好奇心と関心を持てば、無限に思考を膨らませられる原野だ。原野だから、自分から掘り起こす努力が必要とされるのは勿論だ。自分など、そんな豊かな原野に行っても、逆に圧倒されて木や花の名前一つも覚えられずに戻ってくることになるのだが、覚えられなくとも良いのであり、その新鮮な驚きに囚われ、惑わされているだけで満足なのである。」(そうなのか。だけでもスポーツジムや野球など死ぬ人はまず無いが、山では比較的遭難事故があり、中高年には多いようだ。特に有名な登山家と言われる人が多く遭難死しているが?)「あなたは、中高年の私に問うているので、その立場で応えるならば、他のスポーツなどよりも危険を伴う山歩きをするため、高度馴致でもするように易しいところから徐々に経験を積み、山に慣らしてきた。自分は、強気になるより弱気になって、君子危うきに近寄らずが上策と考えている。この年になれば、家の中でも事故で骨折することがあるというからね。山でちょっとした事故で怪我をしても、街中で自転車に接触して軽い怪我をしたくらいに観念する積りである。」とでも応えるつもりである。

(2) 有名登山家が多く遭難死していることについては、渡部由輝のいう反的世界をトコトン追求したための結末ではないかと思う。全体性を希求するために、日常此岸の安穩とした生と反対の反的世界を志向しすぎたためではないか。どこかの時点で極限登山は止めるべきであるが、それが出来ないのである。本会報の2015年11月号「低山を安全に山行するための自己流(2)」の「道迷い例1」で書いたように、人間には、見ているようで見ていないことが起こるものであり、軽登山では大事にならないが、極限登山では往々にして遭難死を招くことになる。判断した結果のミスや天候変化の予測ミスなどにより遭難死を招くことがあるが、「見ていて見ていない式」のことが起こる以上は、どんな登山家にもどこかで止めない限り、事故が起こる可能性は益々高くなる。竹内洋岳は「登山の哲学」で「他のスポーツに比べれば、登山は確かに死が身近に感じられます。だからと言って、クライマーたちは『死んでもいい』と思って登っているわけではない。危険というのは、見えやすいほど避けやすいものです。死を身近に感じられるからこそ、その死をいかに避け、安全に頂上までたどり着くか。それを考えるのが山登りです。」と述べ、更に下山までが山登りだと言っている。また、御岳山の長尾平にある長谷川恒男の記念碑には「登攀の前には、葛藤がある。なぜ悩むのか。それは行動を起こすことによって、「肉体」が減びることを「精神」が恐れるからだ。「精神」とは、ヒトが人間であることを示す最後の砦なのだ。」とある。二人の言葉を理解すると、極限登山の登山家は、生と死を強烈に意識している人である。このことから、極限登山の登山家は、生と死の双方を意識する全体性を求めて反的世界の死に近づきすぎた人であり、近づかざるを得ない人であるのかもしれない。その結果として、多くの有名登山家が亡くなったのではないかと思う。



(3) (好奇心とかいう以外に何か説明のつき難い理由がありそうな気がする?)と難問を向けてきたら、「自分にとって、山歩きは人生そのものという形容とは 全く逆で、逆の反人生を体験できることに無意識に 魅力を感じているのではないかと思う。人生は、生まれて躰けや教育を受け、社会に出て働き、家庭を維持し、子供を育てるという、やるべきことはやらざるを得ないという規範にしばられっぱなしである。これまで、親の子として、生徒として、勤労者として、父・夫として、親戚の一員として、街の隣人として、いろいろな役割を担ってきた。演じてきたとも言える。それは規範を守り従うことである。無二の親友同士であろうと、友人としての人間関係の役割・規範を担ってしまう。完全に自由な人生など無いのである。自分は単身赴任中に土

日の時間潰しを目的に始めた山歩きであったが、週日の規範だらけの生活から脱する方法として完璧に近く且つこれほど手軽なものはないと、意識下で思うようになったのではないか。山歩きは、日常の世界では避けることのできない「規範から放たれた自由、役割を担うことのない処」に身を置きたいという無意識の意識を満たそうとするものであったのか。渡部由輝のいう全体性（規範と自由の双方）を希求して、規範のない自由な反的世界に身を置きたいという論理から山歩きを自分はしているのではないかと思う。極限登山の登山家が下山した時に、強烈な生を実感するのと同じように、低山歩きから下山し日常に戻った時に得られる日常生活を改めて新鮮かつ強烈に実感したいからではないかとも思える。山を歩き里近くまで下りてくると我知らず足早となり早く家で一緒に夕食をとりたいと思う気持ちは、反的世界から日常世界に戻る際の心的作用であろう。簡潔に言えば、「日常から脱して反的世界に遊び、戻って日常世界を新鮮かつ強烈に実感するため」ではないかと思っている。」とでも応えようかと思っているが、「所詮はよくわからないんだ。」が本音のところである。

参考資料

- ▼「ヤマケイ登山学校(1)山を歩く」福島正明、羽根田治 山と溪谷社 1996 年刊
- ▼「山の旅 大正・昭和篇」近藤信行編 岩波文庫 2003 年 11 月刊
- ▼「新編 風雪のビバーク」松濤明 ヤマケイ文庫 2010 年 11 月刊
- ▼「そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見記」ヨッヘン・ヘムレグ、ラリー・A・ジョンソン、エリック・R・サイモンズ 文芸春秋社 1999 年刊
- ▼「登山の誕生 人はなぜ山に登るようになったのか」小泉武栄著 中公新書 2001 年 6 月刊
- ▼「登山の哲学 標高 8000 メートルを生き抜く」竹内洋岳 NHK 出版新書 2013 年 5 月刊
- ▼「自然と国家と人間と」野口健 日経プレミアシリーズ 2009 年 2 月刊
- ▼「なんで山登るねん わが自伝的登山論」高田直樹 ヤマケイ文庫 2014 年 5 月刊
- ▼「エベレスト神々の山嶺」夢枕獏 角川文庫 2015 年 10 月刊
- ▼「名もなき山へ」深田久弥 幻蔵書房 2014 年 9 月刊
- ▼「極限の挑戦者」ラインホルト・メスナー 東京新聞 2013 年 11 月刊
- ▼「新編単独行」加藤文太郎 ヤマケイ文庫 2010 年 11 月刊
- ▼「永遠の未踏峰 人はなぜ山に登るのか」渡部由輝 山と溪谷社 2005 年 8 月刊
- ▼「山の名著 30 選 明治・大正・昭和戦前編」近藤信行編 自由国民社 2009 年 11 月刊